

歩み来し道



古川朗子

竹下珠路編

歩み来し道

古川
朗子さえ



大正五年八月二十三日、当時としては大変モダンな庄野家の長女として生まれ、幼少期は大切に育てられてから九十年余、大正・昭和・平成と三つの時代を、その名前も庄野、園山、古川と変わりながら小さな体で生きぬいてきた朗子さんこの自分史、短歌および折々に書き留め、本人に届けられずに手元に残しておいた書簡、そして九十を過ぎてから夢中になって描いたぬりえなどの記録です。写真は平成二十一年八月、九十三歳の誕生日に、お祝いに頂いた花と共に。

(竹下珠路編集)

目次

了子への詫び状（二） のりこ	6
了子への詫び状（二） のりこ	8
チューリップと教会	15
歩み来し道	17
朗子の古い日記帳から さえ	45
折々につづった歌	55
朗子のぬり絵 さえ	75
あとがきにかえて	93
古川朗子年譜 さえ	96

了^の子^こへの詫^わび状

(一)

十一月、十二月とお腹が大きくなっても、私が商いをしなかったら全然収入の道がありませんから、浜野まで歩いて（約一時間 珠路注）電車で千葉へ行き、リヤカーを引いて銀座通りで商いをしました。

十二月半ばすぎ、東京から篠田さんが見えて、一緒に山の春蘭を取りに行こうというので、私は「山に登るのはつらいから」とお断りしたのですが、「山の下で待っていてくれれば採った蘭を放るからひろってリヤカーに入れてくれればよい」というので、仕方なく付いていきました。かもの堰まで歩いてそのあと五井まで歩いて（家からおよそ一〇キロメートル 珠路注）、さらに浜野の伯父様の所まで行くというので、どうせ私は皆さん並みにはついて歩けないので、ずっと遅れてしまったから、八幡から曲がって一人で家に帰ろうと思ひ、とぼとぼ歩いて菊間の新坂まで来ました。歩くのがつらくて何度も何度も道端に腰掛けて休みながら、いつそ流産してくればよいと思ひながら、やっと歩いていました。申し訳ないことを考えたものね。ごめんね。本当にごめんね。

でも、新坂を登ったところでお父さんが自転車で追い付いて、「どうしたのかと思った」

と云ってくれました。ほっとしたけれど、涙が出てきました。でも異常もなく、年も暮れて元日の朝産気づいたのです。はつ枝ちゃんが自転車で浜野に走ってくれて、お産婆さんと呼んできてくれました。そっとしておいてくれたら自然に生まれるような気がしていました。でもお産婆さんは引っぱり出そうとしました。その痛かったこと。あなたは無事生まれてくれました。元日の朝、十時ころだったでしょうか。誰でもが「おめでとう」と云う日に。

そしてお産婆さんは手伝いに来ていた娘さんに産児制限の話をしていました。うちの家庭は、よっぽど目に余るものがあつたのでしょね。

生まれてきた子には何も罪はないのにね、ごめんね。生まれた最初からいやな思いで聞いたでしょね。私は反発して、絶対大切に育てなくては、と思ったのです。

(二)

平成五年十月十四日

のりちゃんごめん、ごめんなさい。

子供八人みんななつらい思いをさせたけれど、中でもあなたが一番運命悪く引き込んだでしょうか。

生まれる前から、はっきり言えばあなたがお腹に入る前から、良男が生まれてじきの頃から、「もう子供はいらない。これ以上子供ができれば、みんながつらい思いをするだけだから」と思い続けていました。お父さんの要求がいやでいやでたまらなかった。子供たち六人と私たちと、つまり八人が本当に食うや食わずでした。だから子供の増えることはつらかったです、生れ出る子供も幸せにする自信がなかったのです。でも神様はあなたの生命を与えてくださったのです。しかも元日に。誰でもがおめでとうと云う日に。

産気づくまで、どこの病院にもお産婆さんにもかかることができなくて、産気づいてからはつ枝ちゃんが浜野の両国屋さんへ自転車走らせてくれました。

元旦に、だれもおめでとうと云う日に生まれたのに、私の傍らでお産婆さんは、手伝いに来てくれた大槭の親戚の娘さんに、産児制限の話をしていました。とても情けなく思いま

した。家の中の状態がよっぽど貧乏だったのでしよう。私だけでもこの子は大切に育てなくては、と思いました。それなのに、私自身ろくに食べていないから乳が出ないでかわいそうでした。いつでも私の乳を欲しがっていました。ミルクをかうお金がなくて、私の体からしぼりだせるものならいくらでも吸わせてあげようと思って、夜になって横になるとずっと吸わせ続けました。それでもお父さんはよく怒りました。子供のほうばかり向いていて僕のほうを向かないと云って。でも私はあなたを離すことができなかった。するとなおお父さんは怒った。思い出すのも嫌ないやな時代でした。それでもあなたはちゃんと育ってくれた。体は小さかったけれど、病氣らしい病氣は何もしませんでした。

おんぶして、両手に荷物をさげて、浜野まで毎日歩き千葉の花店まで通いました。田圃道を歩いて村田を通って浜野駅に行った時、いつの間にかあなたが持っていた私手作りのお人形を落としていたのですね。次の日道端で見つけて「あらっ」と拾い上げたら、あなたの喜んだ顔、何ともいえない嬉しそうな顔で抱きしめていました。私の手作りの不細工な人形だったのに。私の心は嬉しさでいっぱいでした。了子^{りこ}が本当に可愛いと思いました。

病氣は何もしなかったけれど、よく怪我をしました。私がさせてしまったのね。ごめんね。下の前歯が二本生えたばかりの頃、私が縁側の前でせんたくをしていると、部屋の中にいた

了ち^{のり}ゃんが化成石灰を出してきたのです。そしてあつという間に縁から落ちたのです。私の目の前でしたが、抑える間もなかったのです。そして生えたばかりの前歯二本無くなってしまいました。飲んでしまったのですね。他の歯は生えたのに、小学校になってもその二本だけは生えませんでした。学校の身体検査の時、先生に申し上げると「生えないはずはありませんよ。大丈夫ですよ」と笑っておいででした。なるほど時期になったら生えてきたのでほっとしました。でも、他の歯がすっかり揃っていたので、二本の前歯は奥に引っ込んで生えました。

落ちた時私が抑えられなかったからだ、とずっと申し訳なく思っていました。

また四歳か五歳の頃、私が縁側にいたとき、了ち^{のり}ゃんは道を走っていて電柱の近くで転びました。額からだらだら血が流れていました。洗ってきれいにしてみると、眉毛の中が割れて、口が開いていました。とつさに私の小さい頃長火鉢にぶつかって、目の脇に口が開き縫ったことを思い出しました。大人になってもその傷は消えません。その頃、傷口にはばんそうこうをぴつとはるとひどい傷にならずに治るいうことを聞いたことを思い出しました。そこであなたの傷口をばんそうこうでぴつと引っ張ってはりました。それでも傷口は完全にならなくて、眉毛が途切れた形になってしまいました。人相上よくないのです。申し訳なくてずっ

と気になっていました。今でもです。

あなたの運命に影を作ったのは私だと思っています。ごめんね。

辰巳の前のお店、辰巳マーケットの時代に、うちの店の向かい側、杉田さんのお店でふざけまわってストーブの上のヤカンを自分の手でふっ飛ばし、自分の足に熱湯をかけて大やけどしたことがありますね、小学校二年生の頃でした。奥田病院へ通うのに、始めおんぶしたけれど、重くて重くて、とうとうリヤカーに乗せていきました。上り坂がすごく重かったです。でもその後やけどのあとは完全に治って、わからないくらいになりました。いつでもあなたは私の前でけがをしたのです。防ぐことができなくてごめんね。

昭和四十八年の一月、あなたは車の免許が取りたいと云いました。でもそれには大金が要ったのです。店は繁盛しているように見えたでしょうが、品物の仕入れ代、大勢いた従業員の人件費などでいっぱいだった。余裕はなかったのです、ごめんね。不満だったでしょう。卒業の記念旅行に新島に行くと言った時も、費用は自分で貯めてであると云ったからほっとしたもの、おこずかいもあげないでごめんね。あなたばかりでないの、良男にも友子にも、大きい子供たちみんなにも、私は謝ることばかり。

そして突然あなたはいなくなりました。何か事故かと思ってずいぶん探しました。占

いにも見てもらいました。でもみんな「生きていますよ」と云うばかり……。

フジテレビ 木曜班 北朝鮮担当者のぶとも様 と伺いましたが、今でもこの担当のぶとも様でよろしいのでしょうか、平成九年三月二十七日 十四時五十分ころ、フジテレビで拝見しその時にお電話差し上げたものでございます。

のぶとも様は、元北朝鮮の「アンさん」と云う方に会われて、横田めぐみさんのことを聞かれたとか、その他にも二十名くらいも日本人が連れていかれている様子だったとか話しておいででした。その二十名の中にもしやうちの娘も居るのではないかと思ひ、名前、年齢など電話で申し上げてあったのですが、それから以来のぶとも様のお話しは画面に出てきませんので、再度、行方不明の娘の名、年齢、特徴など申し上げます。

「アンさん」でなくても、北朝鮮関係の方にお心当たりがございましたら調べていただきたいと存じます。行方不明になった時の娘は、

住所 千葉県市原市菊間一四五一

氏名 古川 了子（ふるかわ のりこ）

生年月日 昭和三十年一月一日（不明当時十八歳）

本籍地 千葉県市原市菊間一四五一

学校 市原市菊間小学校 菊間中学校卒業

千葉県立千葉商業高等学校昭和四十八年卒業

当時 三井造船（株）市原事業所勤務

行方不明年月日 昭和四十八年七月七日

身長 一五五cm位 体重四〇kg位 当時の体型です

特徴 左眉毛の中に傷あり 前歯下二本が奥に引っ込んでいる

そろばん、習字良くやる方と思う

私は古川了子^{のりこ}の母親でございます（八十歳）。父親は昨年四月になくなりました。

市原市の住所は昭和二十年から今年二月まで五十三年住んでいましたが、昨年父親が亡くなってから了子^{のりこ}の兄妹たちが皆で心配してくれて、二番目の娘の家に厄介になることになりました。この家も了子は何回も来て知っているはずです。

のぶとも様でもあるいは係が替わられたらそのお方様でも、北朝鮮関係のことお心当たりがございましたら恐れ入りますがご一報頂きたくお願い申し上げます。

平成九年春

（珠路注：平成九年三月に「元北朝鮮工作員」というテレビ放送を見た朗子^{さえ}が、「もしかしたらうちの娘も」と電話をし、この手紙と共に一枚の写真をテレビの担当プロデューサーに郵送しました。その年の秋、このプロデューサーが北朝鮮から脱北した元工作員「安明進」氏に写真を見せた所「とてもよく似た女性にあった」という証言をしてくれました。徳間書店安明進著「北朝鮮拉致工作員」で言及。「娘了子は北朝鮮に拉致されていたから私のもとに現れなかったのだ」という思いを確信し、横田めぐみさんたちの情報を聞くたびに娘の安否を気遣い、その後、千葉県警に被疑者不明のまま告発状を提出し、日弁連の人権擁護委員会に「人権侵害救済申し立て」、政府に対して「拉致被害者認定を求める行政訴訟」を提訴しました。

了子^{のりこ}への詫び状はテレビで「北朝鮮による拉致」ということを知るより数年前に書いていたもので、誰にも話せなかった思いを、了子^{のりこ}に向けて書くことで、少しでも了子につながりたかったものと思われる（ます）

チューリップと教会

チューリップ



私が日本基督教会に育てられたのは、大正十二年九月一日に母ルイが蒲田御園の父篤朗の家で亡くなってからです。

大森の大森教会の牧師のお導きによって、我が家で日曜学校を始めるようになり、小学生くらいの子供たちが大勢集まりました。

クリスマスの際は父が大きなツリーを買ってきて、それに付ける飾りものもたくさん買ってきて、子供たちで飾り付けをしました。

イースターの時は、あつまる子供の数だけ卵をいっぱい買ってきて、それを茹でて赤や緑の食紅で色付けしてきれいな柄入りの卵にして子供たちに配ったり、イースターの歌を歌ったり楽しかったです。オルガンも買ってあったので、誰がひいたか覚えていませんが、いつでも誰かがひいていました。

教会の会員の中にチューリップ畑を作っている方があって、春にはそのチューリップをたくさん切ってきて、夕方の夜店で教会の店として売ったりしていました。

（珠路注：チューリップの花がたくさん咲いているのを見ると、いつも語ってくれる）

歩み来し道

平成十四年十月十二日

平成十四年四月二十四日、妹篤子は思いがけず「クモ膜下出血」で逝ってしまいました。

庄野篤朗と庄野ルイの子供四人のうち、総領の私が八十五歳の今日まで、父と母が早死でしたから、親たちが守ってくださっていると感謝していたのですが、一番上の私を残して、二番目の篤子さんが先に逝ってしまったのはどうにも残念です。

小さい頃から一緒に通った蒲田の御園教会から「思いで記を書いてください」と言われ、私の覚えているままにしたためました。その後千城台の教会の会員からお誘いをいただいて、千城台若葉キリスト教会に出席させていただきまして「昔々子供のころは毎週教会のお世話になりました」と話したところ、その頃のことなど書いてほしいといわれて、またまた古い話ですがと思いながら書きました。

その古い話を書いているのを見て、「母さんの昔のことなど、家族は誰も知らないのだから書いてみたら」と珠路がこのノートとペンを買ってきてくれました。

アラッと思ったのですがいつの間にか八十六年生きながらえてしまつて、いったい私は何をしてきたのかしらと思ったとき、完全に覚えてはいないけれど、少し書いてみようかしらと思ひ始めました。

一番小さい時のことは、麴町四丁目に住んでいたころ。

二階家だったと思います。庭に二匹の犬が居て、私はいつでも犬と遊んだこと、五歳の時に父の仕事の都合で蒲田に移ったこと、やはり二階家でしたが、篤子さんが二階の階段から落ちて平屋に移ったこと、私たちはその家で育ち、学校を卒業し、嫁入りをし、弟と妹と父の葬儀をし、昭和二十年の空襲に会うまでその家はありました。

いよいよ空襲のあった日、偶然私はその家に行っていて、まだ赤ん坊の珠路を背負い、小学生だった勇君の手を引いて、街中の方から押し寄せてくる火をおびえて眺めながら、多摩川の方に大勢の人の中に連れられて逃げました。家を出る時、勇君が「学校のランドセルを持って行こうかリュックサックにしようか」と云っていたので、「リュックは何が入っているの?」と聞くと「何か知らないけど、お母さんがこれは大切なものが入っているからね」と云っていたというので、「リュックにしなさい」と云った覚えがあります。

ずっと後になって「勇が大事なものを持って出てくれた」と云って母が喜んでいました。「それにしてもあなたは何も持たなかったのね」とも云われ、足元にあった長靴をはいて出たことなどは気もつかなかったようでした。田園調布の宮尾さんの家でちびた下駄を一足頂いて大厩に帰ったのです。(珠路注…このとき朗子が持ち出した唯一のものは、大厩の親戚から借りてきたアルミの弁当箱のみだったと語っていた)

庄野の家が焼ける三日前に西ヶ原の家が焼けたので、後始末をしに行つたのですがそれどころではなく、西ヶ原は様子を見ることさえできませんでした。

大厩に帰ってきたら、富也と智世をお義父さんがちゃんと世話してくださっていました。お義父さんは「西ヶ原は私がいれば焼けなかったかもしれない」とおっしゃいましたけれど私は「加茂さんたちが居てくださったから焼けるのも一番あとだったようですよ。加茂さんたちはいい加減な消防ではなかったと思います。充分手を尽くしてくださったでしょうから、それまでの運だったでしょう。もしおじいちゃんがそこにいらしたら、きっと息が切れておじいちゃんの方が心配です。こちらにいらしてよかったと思います」と申しました。

そして大名（竹内常次さん宅）の家に私たち西ヶ原の五人と、加茂さんの六人がお世話になりました。竹内さんの家はうちのお義父さんのお兄さん（常次さん）と戦死した隆さんのお嫁さん（よねさん）の二人でした。大変なお世話をおかけしました。

何カ月もしないで加茂さんたちは東京に帰りました。

家は親戚の皆さんが心配してくださって、千葉の寒川近くに強制疎開で畳んであった家を安く手に入れてくださったので、それを馬車と人として引いてきて親戚の方たち総出で一戸建てを造ってくださいました。

お義父さんと私、小学二年生の富也、四歳の智世と二歳の珠路、父親は戦地に行ったきり生死の便りもない時でした。親戚の方たち皆様どちらの方も親切で何とも申し上げようのない良い方達でした。

家ができたのは二十一年二月十六日でした。「新居に入るのは十六日にしよう」とお義父さんがおっしゃって「縁起の良い日だから」と云われるので、なぜ？と聞くと「あんなたちの結婚記念日だろ」と云われて、私の方がびっくりしました。よく覚えていてくださったものです。確かにそうでした。私の方がすっかり忘れていました、ありがとうございますお義父さん。

一ツ橋の如水会館で振袖を着せてもらって、自分の髪で高島田を結ってお式を挙げたのを、お義父さんは覚えていてくださったのです。庄野の父も、園山の義母も、肝心の園山徳三郎も居ました。その三人が今はいらっしゃらないのです。お義父さんの思い出につられて、うれしい気持と淋しい気持ちとがごっちゃになりました。

思い出の順はあと先が狂ってしまいました。

五歳で蒲田の住人になって数え年八歳の時、その頃はそ



こで一年生になったのでした。ところが母の姉が横浜のガス会社の社宅にいて、その近くに神奈川縣立の女子師範があり、その従姉妹たちはみな師範の附属小学校に通っていました。その関係で私もその師範の附属小に行くことになり、入学試験に行った覚えがあります。

自分の名前を書き、年齢を書き、日の丸の旗を書いてごらんと云われて、中心の丸をぐるぐると二重三重に書きましたら、この旗は本当に日の丸ね、と先生がにこにこしていらっしやいました。そこで蒲田から横浜まで通うことになったのでした。

大正十二年四月からでしたが、女子師範の附属小学校でしたから紺の制服で黒い皮のランドセルでした。今の子どもたちのような大きなものではなかったけれど、外側に帯皮の付いたランドセルで、小学生としては珍しかったようでした。

九月一日はまだ始業式ではなく、家に居ました。あの震災（関東大震災）の時は家に居ました。もし学校に居たらどうなっていた事やら。

学校内で地震にあったか、帰宅途中で歩いていたら、電車の中か、生きていたかどうかさえ分かりません。運命としか云えません。

その夜、長患いであった母は、震災のために身体を動かしたのが悪かったのか、父も私たちも居る前で亡くなってしまいました。

大正十三年、すぐ近くに住んでいた母のお友達が新しい継母となつて来てくださいました。九歳の私が一番上で、七歳と数え年四歳の妹と二歳の弟と居りましたから、父は困ったのでしよう。亡くなった母と親しい方でしたから父も安心したと思います。私より十五歳年上の方でした。次の年、弟が一人増えました。そしてまた二年後一人弟ができて、その下にまた二人妹ができて、その下にまた弟ができました。しかし始めできた弟は四歳の時に疫病で、次の弟は五歳の時にジフテリアで亡くなってしまいました。そのまた二人目の妹も女学校にはいつて間もなく、白血病で亡くなってしまいました。新しい母の子三人までが病死して、母はどんなに淋しかったか、悔しかったか。

私も小さい弟妹たちのこと、何ともいえず淋しかったのですが、母は私が思いやりがないと怒っていました。母が何かにつけて怒る気持ちにはわかるけれど、私だつて四歳五歳の弟が亡くなったのは、母の前ではなく、陰で弟妹たちと泣きました。かわいい弟、妹たちでした。何人居ても小さい弟妹たちは可愛かったです。

震災から三日ほど経つてから、横浜行の電車は六郷橋が通れなかったもので、汽車の路線で行ったのです。伯母がついて行つてくれました。学校はつぶれていました。それからしばらくは、晴れた日は運動場で先生のお話を聞いたり、山や野に行つて野外授業であつたり、

雨の日のことは覚えておりません。

しばらくして木造の学校ができました。新しい木の香りがしていました。

横浜駅から学校までの間に、大きな倉庫だか工場だかのそばを通ると、焦げたお米が山盛りになっている所がありました。お友達とたいへん情けない思いをして眺めたものでした。

横浜の学校へ四年生まで通いました。五年生になったら新校舎が本牧に建ったので、師範もろとも附属小もそちらに移ることになりました。横浜の次の桜木町まで行つて市電に乗り換え、本牧までいくのです。蒲田からは又ちよつと遠くなるので、私はもう横浜まで行きたくないと申しました。そこで母は蒲田の町立の小学校へ移籍させてくれました。横浜まで一時間くらいかかっていたのが、今度は学校まで五、六分で行かれたのですから嬉しかったですし、お友達も近所に何人もできました。五年六年と蒲田の相生小学校に居ました。高等女学校を受けることになって、府立の第六と第八と両方受けました。第六の方は体育を重視したとかで、私はたださえ体が小さい所に、体育は好きではなかったので、第八に合格してほつとしました。第八は楽しかったです。とうとう五年間皆勤で通しました。

仲の良いお友達は何人も上の学校に行きました。私も行きたいと思いましたが、妹が二人続いて女学校に行くし、弟もその下にいるし、その下にも妹も弟も居るのだから、そんな

に学校を続けられないと云われてみれば、それでもとは云えませんでした。

昭和九年に第八高女を卒業して、活け花、お茶、洋裁、日本刺繍と色々稽古をさせてもらいました。今になって考えると、私はいろいろ習い事をさせてもらったけれど、私の子供達には何も習わせなかつたし、お道具も何も持たせなかつたと悔やまれるばかりです。

母はこれも買ったよあれも買ったよと云つて、何も不足ないはずだと云いながら、お金がかかるとお金がかかると云いますから、私は「何も要らない。それなら私が働きに行く」と云えば「庄野の娘を働きに出したとなつたら、私が世間様や親戚に笑われる。やめておくれ」と云われました。そんな時代でした。そして「これだけの御縁に不満を云つたらわがまますぎるよ」と云つて縁談をどんどん進めてくれたのでした。

正直言つて私は、向こう様はどんな方でもよい。お母さんが気に入ってくればそれでよいのだと思つて返事をしたのでした。お道具でも着物でも、今から考えるとずいぶん豊富に揃えてくださったものでした。指輪でも、今覚えているだけでもルビー、黒曜石、サファイア、翡翠、まだあつたかもしれないが忘れしました。園山のお母さんから純金の指輪を頂きました。京城に居る時ずっと着けていました。純金と云うのは指に着けていると指の形に

楕円形に曲がるのです。後になって、園山のお母さんが「戦争だから仕方がないね」とおっしゃったので寄付してしまいました。

庄野のお母さんが、これも買ったよあれも買ったよと云われると、ありがとうと口では云ったものの、今考えると、私のありがとうの言葉は本当の感謝の心がこもっていなかったのかなと思います。母の方は、父の手前や親戚の叔母さんたちの手前、朗子のためにこんなに私が揃えてやっているのだと、自分の手柄も発表したかったのかもしれない。そうでなくて、もうじき嫁に出すのだから一生懸命買って揃えましょうというお気持ちを私が理解できたら、もっとも感謝の言葉を云えばよかったと今頃になって考えています。

黒地に梅の絵羽織を買ってくださったことがあります。縫いに出す時、羽織の寸法は？と聞かれたので三尺三寸と云ったように思います。すると母は「三尺五寸にしときなさい。せつかく良い品を買ってあげるのだから、三寸にしたら立派な柄が隠れてしまう」と云われました。羽織丈の少し短めがはやりだした頃でした。私はギクンとききました。私の身長に似合うかどうかより、買った羽織の柄をなるべくたくさん他人さまに見せることが大事なのかな、つまり私は「えもんかけ」にすぎないのか、と思われたのです。素直に私の気持ちを母に伝えることもできなかったのです。

夏、八月一日から一週間お茶の講習会がありました。もちろん和服ですから、どんな着物だったか覚えていませんが、母がレースの長襦袢を買って下さいました。常に「新しい品を洗濯すると、そのたびに生地は傷んでゆく」と云われていましたから、一週間、講習会の間中着通して、夕方帰宅すると乾かして、翌日またそれを着て行きました。一週間着通したら、自分で着たり脱いだりする時にも汗臭いのがわかります。講習会の最後の日に、帰ってすぐ長襦袢を洗いました。乾しているのを見つかってしまい、母はすぐ怒りだしました。「この間買ったばかりなのにもう洗ったの。洗うたびに生地は傷むといつも云ってるでしょう」他にも何か気に入らないことがあったのか、その時の怒りようはひどい剣幕でした。私も我慢できなくなつて、泣きながら、もう此処には居られないと思つて何のあてもなく、どこへでも行つてしまおうと思つて歩き出しました。できたら多摩墓地まで行つてしまおうと思つてどんどん歩いて行きました。ところが、家のねえやが追いかけて来ました。「そんなこと云わないで帰っていらつしやい。お母さんの怒るのはほんの一時なんだから。本気で怒っているのではないから」としきりになだめてくれました。いつでも陰になり日向になりしてかばってくれるねえやでした。なだめられて、やつぱり行く先を決めて出たのではなし、少し時間がたてばやはり家を出てもあてがあるわけではなし、ねえやになだめられて帰つてきま

した。母は何も云わなかったし、私も自分の部屋にはいつて知らん顔をしていました。家を飛び出したのはこの時だけでしたけれど、何を買ってくださったても何時でも「お店にあった一番良い品を買ったのよ。結構高かったのよ」と云っていました。それでも私に買ってくださった品はみな値札をはがしていました。そして、よい品だよ、高かったよと云うばかりで、つまり私には品物の本当値打ちを教えてくれませんでした。

横浜の小学校へ通った頃、レインコートを買ってくれました。「上等の品だから雨が降っても洩るようなことはないから、大切にしなさい」と云ってくれましたが、上等の品というのは重くて、今降っていないければ小さい体で思いレインコートを持って歩くのは大荷物なので、玄関のわきに置いて出てしまったりして、また後で怒られたりしたものでした。蒲田駅に帰ってくると、雨が降っているときは大勢の人が傘を持って迎えに来ているのでした。家族の温かみがうらやましかったものでした。びしょ濡れになつて帰ってまた叱られました。今になつてみると、雨もよいだからちゃんとレインコートを持って行きなさいと云つて出してくれた母の気持ち、重いコートを持つのがいやだった私のわがまま、小さい弟妹が大勢いて、駅まで迎えに来ることができなかった母の事情も気がつかず、迎えに来てもらいたい私の甘え、ともかく、私の下に次から次と妹弟が続いて大家族であつた家庭を、わたしと十五

歳しか変わらない母が切り盛りしていた苦勞を思いやる家族としての心配りが少しもなかったと、今になると申し訳なく悔やまれます。

昭和二十年三月末には東京の小学校は全部廃校になり、親戚のある子どもたちは縁故疎開と云って田舎の親戚を頼ってそちらの小学校に行き、親戚のない子どもは、学童疎開と云って地方のお寺などに住まいして、その地方の学校に入れていただくなどしました。うちは、園山のお義父様のお兄さんのお宅が千葉県市原郡の大厩にありましたので、お義父様と私と子供三人とでお世話になりました。富也は菊間小の二年生に入れていただきました。庄野の勇君は福島県だったかのお寺に学童疎開に行きました。



四月の初めころだったと思います。お風呂に入れようとして、珠路を裸にして私が風呂に入る支度をしている時に、囲炉裏の側で珠路が転んでお腹と股に熱湯を浴びて大火傷をさせてしまいました。大泣きしている珠路を背負った私を、親戚の若い人が自転車に載せて病院に走ってくれました。途中で珠路が泣かなくなったので死ぬかと思つてずいぶん心配しました。一生懸命名前を呼びながら病院についたら、薬がいくらもないというのです。一二三日前に千葉で大空襲があつて薬の欲しい人がたくさん来たのだそうです。ともかくあるだけ皆使いましようと思つてくれました。武田病院でした。それから親戚の人達が心配してくれて、ドジョウを割いて幹部にはるとよいと思つてくれて、ドジョウをたくさん持つて来てくださった方がありました。八幡宿にいた親戚の人は、漢方薬か民間薬か知りませんが、色々な薬を持つてきてくださつて、本当にありがたいことでした。一歳一か月の子どもでした。親の私の不注意で、申し訳ないことをしました。今でも私はその子の肌が気になります。本人は「もうそんなにひどい傷ではないから大丈夫」と笑つていますが、私の心の中の傷はそんなに軽いものではありませんでした。大きくなって水泳をするようになったらつらいだろうなと気になっていましたが、私が心配すると思つて言葉に出さなかったのか、本当にそんなにひどくなく、傷が薄くなつたのかわかりません。大人になつてからの身体を見るのも心

苦しく、本人は大丈夫と云っていますから信じています。

古川が病院に行つて来て、「肺浸潤」と云われたと云つて「すまないが智世と珠路とに伝染するといけないから、親戚のどこかにしばらく預かつて頂けないか」と云われて、中学二年の智世は竹内さんに、小学六年の珠路は銚子の園山さんをお願いすることになりました。高校生の富也はその前から延命寺の小林先生がお引き受け下さつて、園山の子供三人ともあちこちに離れてお世話になりました。私は淋しくなりましたけれど、とにかく食べることさえ苦しかったので、夢中で働くことに一所懸命で、園山の子どもたち三人だけは何とか皆様のお世話になつて暮らしてゆくことができたのでした。古川の子ども、弘一とはつ枝は、中学校に行かれるように手続きは取りましたが、弘一は父親が商売を手伝えと云つてろくに学校に出してやらず、休ませて商売の手伝いに連れて行きました。せっかく学校に席が取れるようになったのに、と思つて私は反対しましたけれど、私がまだ商売と云うことに全然慣れなかつたので、父は慣れている弘一に店の手伝いをさせないわけにはいかなかつたのでしよう。はつ枝には良男を負わせて学校に連れて行つてもらいました。弘一もはつ枝もやっと学校に行けるようになったのに、満足に勉強もさせてやれず、かわいそうでした。それでも

二人とも不平も云わず父の云う通り働いていました。父のいない園山の子三人はちゃんと学校に行かれて、しかも三人とも優秀と云われているのに、古川の子は父親がちゃんと居るのに、学校も満足に行かれず、食べることさえ満足に行かないということはこういうことだろうと思うのでした。

私も、ともかく子どもたちにお腹の空いた思いをさせないようにしたくて、それだけは何としても思っただけ働きました。中学校を卒業すると、弘一もはつ枝も東京へ仕事に行きました。はつ枝には亡くなったお母さんの妹さんがいて、東京ではずいぶん力になってくださったようでした。皆それぞれに一生懸命働いたのでしょうか、はつ枝も叔母さまのお力添えで、立派に結婚して子供三人よい子どもたちが揃いました。弘一はさすがに男の子、辰巳団地の中でひととき目立つ存在になって立派な生活を始めたのに、平成五年の五月一日、働き盛りの五十五歳であつたという間に逝ってしまいました。

うちの商売は夫が揃えてくれるサボテンや花鉢、山野草、それも私がお客様に説明ができるようになるまで、容易なものではありませんでした。でも、園芸品を覚えることは楽しくて、次々と知らなかった植物を覚えて行き、肥料の名、使い方、育て方など一生懸命でした。

そのうち、生花を扱う方が確実に収入になるし美しいので楽しいと思って、生花に力をいれるようになりました。昭和三十年代の終わりのころ、辰巳団地に初めてマーケットができて、その中に花屋があつてもよいといわれ、店を一つ入れていただきました。千葉に花市場と云う所があると教えてくれたのは古川でした。市場での買い方、その花の扱い方、皆古川から習ったのでした。お花の活け方は若いころにお稽古していたので感覚よくできてお客様に喜ばれ、お客様がだんだん増えてきました。向かい側に外国人向けの宿舎があつて、毎週、千葉市内の花屋がお稽古用の花を近所に収めにきていましたが、先生が教えている間、車を止めて稽古が終るのを待っていたのですが、私の店を眺めていて「よく客が入るな。また入った、また入った」と市場に帰って話したそうです。おかげさまで生花店は結構繁盛したのですが、良男が高校を卒業して商売をするようになり、生花も園芸品もよく繁盛するようになったら思いあがつてしまったようで、私の言うことなど全然聞かなくなっていました。店の売り上げは全部自分の思うように使い始め、五井に空き地を見つけて大きな支店を作り、銀行から借金をして生花園芸店に金魚も置いて、従業員は父と相談して東京から父の昔からの友達を呼んで大きな店を始めたり、若宮にも店を出したり、辰巳の店の売り上げを持って行ってどんどんそちらに力を入れました。しかし店の発展とは違う方向のように私には思えたの

ですが、男がこうと思つて始めたことなら、私とは違う考えがあるかと思つて、私は辰巳だけはいささか押さえて行こうと心がけていました。

ところが、五井の店はなぜか繁盛の様子が見えず、私は辰巳で手いっぱい、若宮と五井まで手が回らず、辰巳が休みの日にそちらに応援に行こうとすると九洲男さんは「辰巳が休みの日くらい僕のそばに居られないのか」と云つて怒るのです。良男はちゃんと店番している様子がないようです。手を広げるだけで、店の繁盛について力を入れているようには見えません。花市場の支払いがその頃から段々おろそかになるようで、家の方に督促状が来るようになります。「どうしてちゃんと支払いをしないの?」と聞くと「金がないよ」と云います。「そんな筈はないでしょう」と云うと「本当だよ」と云います。たびたび言うと、私の傍を避けて通るようになります、売り上げをどこに持つて行くのか出て行つてしまいます。「市場にだけはちゃんと支払つてよ」と云うと「わかつているよ」と云うので、ちゃんと支払っていると思っているのに、いつのまにか市場の支払いが膨大なものになってしまつていくのです。あちらもこちらを支払いが滞つてきて、どうしたらよいのか思いあぐねてしまいました。私の手元で支払えるところは一生懸命払うのですが、どうしてこんなに支払いが滞るのか、不思議なことになってしまいました。ついには、私の国民年金が出るたびにそれもそっくり支払

いに回すようになって、それでも足りずに、良男が借りた借金も払えず、結局家も土地もすべて手放さなくてはならなくなりました。良男はどこに移ったのやら……。

私は子どもたちが相談の末、千城台の竹下の家に世話になることになりました。

竹下には大厩にいる間からずいぶん迷惑をかけています。とても心苦しくて、世話になれた義理ではないのですが、どこに世話になっても心苦しいのは同じです。私が良男の教育が悪かったのです。子どもたちにも申し訳なかつたと思います。良男にも親としてちゃんと責任もって教え込まなかつたのが悪かつたと思います。良男も恐らく苦しんでいることでしょう。男の子のすることだからと、なまじ信じてかかつたのが大変な誤りでした。良男のためにも申し訳ない教育をしてしまいました。いま、過去の過ちを振り返りつつ、まっすぐ歩いていければいいかと祈っています。過去に迷惑かけた所に、一足づつでもお返しをするように、心がけてくれていれば、それが良男の幸せにつながると 생각합니다。

了子^{のりこ}のために、いま日本中で皆さんが祈っていてくださいます。良男も念の強い人です。特別に了子^{のりこ}のために祈ってやってください。北朝鮮に連れて行かれたことがほぼ確認されてきているようで、あとはどうしたら探し出せるか、私も毎日お経をあげています。良男も了子^{のりこ}

子のために、また良男自身のためにあなたの強い念でお経をあげてください。

平成十五年八月十四日、しばらく怠けていた自分史をまた思い立って書いてみます。

竹下家の皆様のおかげで、何不自由なく楽しく生活して居られること、心の底より感謝しております。

竹下のおしさんを岡部から迎えにいらしたので、淋しくなっただけけど、おしさんはやはり静岡にお帰りになるのが本当でしょう。一番落ち着けるところでしようから。お病氣も、今までずっとかかりつけどったお医者様がいらっしゃるのだし、娘さんが何人もおいでだから、娘さんたちが代わる代わるお見舞いにお出でになれるでしょう。容体があんまりよくないと電話を頂いたようで、敦之さんも珠路も心配しているけど、これ以上どうしてあげたらよいのかわからない。この家族でしてあげられることは、充分してあげていたように思う。おしさんも喜んでいてくださったと思うから。後はやはり息子さん、娘さんのそばにお出でになるのが一番良いのだと思われる。結局そこで最後の日を迎えられたのだから。

考えてみれば、私もそうでありたいと思うけれど、私はそうはいかない。父の最後の時、

私は朝鮮の京城に居たし、生母のその時はそばに居たけれど私自身が小学校一年生だったし、都志母さんの時は菊間に居て、連絡を受けて駆け付けた時は病院から自宅に運んであったし、私の時もこれだけ大勢の子どもたちが揃って顔をみせてくれるとは思えない。まず良男、そして了子の二人が何時顔をみせてくれるのか、見当もつかない。孫も多数曾孫まで居るのに。毎日仏様のお水お茶ご飯を新しくお供えして、昨日のご飯は水を足して庭に撒いてやると、私が家に上がるのを待っていたように雀が周りから降りてくる。五羽、六羽、多い時はもっと群れになって数えにくいほどご飯粒を拾っては飛び上り、またちよつと拾っては飛び上り、見ているとちよんちよんと雀が遊んでいるようできりがありません。

辰己の店をとにかくちゃんと揃えて、生活を立てなくてとはと、夜七時に店を閉めて自宅まで帰り、夕飯を済ませて洗濯物をして、それからまた辰己の病院に行つて、九洲男さんに少し食事をあげて、すこしお楽しみのお菓子も食べさせて、そうすると九洲男さんはいつでも「かあさんよくやってくれるよ。おいしいよ」と云ってくれました。何度も「かあさん、よくやってくれるね」と繰り返す言うのでした。なるべく好きなたばこを手にしないように、お茶を飲ませたり、少しづつでもお菓子を食べさせたり、テレビはあまり興味がないらしく、少し

長時間になると「もういい」と云いだします。見ているのが疲れるのかも知れません。はつ枝ちゃんと友ちゃんはまめによく見舞いに来てくれます。朝、九洲男さんの食事を済ませると私は店に出て、店番をして、午後には市場の人が生花を持ってきてくれるので必要な品をそろえて水揚げをして、夕方店が終わると大厩に帰って洗濯や私の食事の支度をして、明日の店に必要な準備をしたり、遅くなってもまた病院へ行つて、九洲男さんが安眠できるように身の回りを整えます。大厩から病院に戻ると、やはり私の顔を見るとホッとするらしく、「店に言ってきたか？大厩に行ってきたか？ご苦労だったね」と言葉をかけてくれます。でもだんだん言葉が少なくなってきました。いつでも「ご苦労だったね」と一度は言います。「大厩に行つて、またここまで歩いてくるのか？」と聞くので「バスのある時間ならバスできますよ」と云います。店番が誰かいるときなら代つてもらつて、できるだけ九洲男さんのそばに居るようにしようと思います。院長先生も若先生も「お具合がよくなさそうですね、いつどうなるかわからない」とおっしゃいます。若先生が「声がよく出ないようで、声を出すのに苦労しておいでようです」と……

（以下筆が止まったまま、九洲男は平成八年四月十日逝く…珠路注）



これより後は「もう字は書けないので…」と云う朗子母からの聞き書きや、以前に話を聞いていたことを、文章にしたものです。（珠路記）

私が小さい頃は、洋服はほとんど父が縫ってくれました。母ルイが病弱だったこともあり、私のはもちろん、妹たちの物まで、ワンピースやスカート、ブラウスなどとても素敵なものばかりで、父がミシンに向かつて縫ってくれるのが嬉しくて仕方ありませんでした。父は黒澤商会の技術者としてアメリカでタイプライターの技術を学んできたのですが、機械や細かなことが大変好きで、洋服のデザインも自分で考えて、それぞれの子に合うように工夫してくれました。また、イースターの時には、私の家で日曜学校を開いていたので、卵を山ほどたくさん買ってきて茹で、一つ一つにきれいな絵を描くのが父の楽しみであり、私たち子どもの楽しみでもありました。そんな父が時々、銀座の不二屋に連れて行ってくれ、それはほとんど私だけでしたが、「このアイスクリームはうまいぞ」といつてご馳走してくれました。足のついたお皿に半丸のアイスクリームがのり、その横にウエハースがちよこんと添えてあるものでした。本当はアイスクリームよりもウエハースの方が好きだった私は、ウエハースを食べるのが嬉しくて不二屋について行ったようなものでした。

まだ西ヶ原に住んでいたころだから智世子が三歳か四歳のころ、智世子はとってもおしゃべりでした。ある日庭で遊んでいるとばかり思っていると、どこにもいないと云ってねえやが騒いでいました。一人で遠くまで行かれるわけではないし、どこへ行ったのかと、ご近所にも聞いて回りましたが、どこにもいません。これは大変だと交番に駆け込むと、なんとそこに智世子がちよこんと座っているではありませんか。そしておまわりさんを相手に、ずーっとおしゃべりをしていたそうで「お話好きなお嬢ちゃんですねぇ」とおまわりさんに云われてほっとするやら恥ずかしいやら、何度も頭をさげて連れて帰りました。

珠路が四歳か五歳のころだと思いますが、私が農協に務めていたころ、毎朝私が仕事に出かける時間になると珠路がついてきて、あまよし（斜め向かいの家の屋号）の角まで送ってきました。私が角を曲がろうとすると、珠路はクルリと踵を返して竹藪の陰に隠れるようにしています。その姿が何とも淋しそうで、「おじいちゃんと二人で留守番なのに、やはり母親がいないと淋しいのかな」と思ったものでした。毎日そのクルリと踵を返すのを見るのが、妙に切なく思いながら仕事に出かけていました。

智世が生まれたのは、徳三郎の仕事で朝鮮の京城に行っている時でした。おなかが大きくなってきたある日、東京から電報が届きました。『アツロウキトク カエル二オヨバズ』というものでした。父が危篤だということです。病氣だったとも聞いていないのに、どうしたわけかと思っていると、徳三郎が、『おまえは身重だから船と電車の長旅は無理だ。私が行ってくるから待っていなさい』といつてすぐに出かけてくれました。今なら飛行機で数時間で行かれる距離ですが、その頃はまず博多まで船で行き、その後列車に乗り換えて、京都でまた東海道線に乗り換えて、何日もかかってようやく辿りつくのでした。義母は私の身を心配して「カエル二オヨバズ」と云ってくれたのでしようが、私には何とも悲しくて、夫が行ってくれたのがせめてもの慰みになりました。

智世はその後の八月に無事生まれましたが、東京と違って手伝いの人がいません。近所のオモニ（おばさん）が来て面倒を見てくれるのですが、何としても言葉が全く分かりません。そのうちオモニは自分の子供を連れてきました。子供は日本語がわかるのです。子供に通訳を頼み、ようやく意志の疎通ができました。

秋の朝鮮は真っ赤な色です。列車の窓から見ていると、低い屋根の上にも庭にも、そこいらじゅうにトウガラシが乾してあります。むしろのようなものをした上に、どうしてあんな

なにとたくさんあるのかと思うほど、一面に真つ赤なトウガラシの海で、それはそれは美しい景色でした。



千葉で露店を出していたころ、後片付けが遅くなり終バスに乗り遅れることもときどきありました。浜野まで列車に乗り、背中に子を负ふい、良男の手を引いて浜野から真つ暗な道をとぼとぼ歩いて帰ると、四歳か五歳だった良男が「母ちゃん、ぼく大きくなったらトラックの運転手になるよ」といいます。「どうしてトラックの運転手なの？」ときくと、「そうすれば母ちゃんをいつもトラックに載せてやれるから」と云ってくれました。こんな夜の暗い道を歩かなくてもすむようにという、やさしい良男の言葉でした。「うん、はやく運転手になってね」と答えましたが、良男は大きくなって花屋をするようになり、彼の運転するトラックに何べんも何べんも載せてもらったことでした。

朗子さえの古い日記帳から

（花屋の商売をしていた当時書いていた日記帳から転載）

平成四年十二月二十八日 晴れ

今日から五井へ良男と美帆が行く。辰男さんと純子さんと私とで辰巳店のあげ花を作り、セツト花を作り、その間にお客の相手。まだ正月花よりお見舞い花が多い。

十二月二十九日 晴れ

朝から一日中店売り。結構お客様がきてくださる。

十二月三十日 晴れ

一日中店番。辰男さんと純子さんと友子と私の四人だが、結構忙しかった。柳を昨年より百束増やしたと言っていたが、それでも足りずに電気屋さんのも全部使う。

十二月三十一日 晴れ

友子が来てくれたので、今日は家のことをしてくれと言われて、まず仏壇、床の間の掃除から始める。お父さんがいろいろとお料理を作ってくださったので助かる。

平成五年一月一日 晴れ

いよいよ平成も五年となった。午前、大厩町会の新年会に出席する。笹川さんのまさ子さんと私と女は二人きり。四十代、五十代の人たちが中心といった感じ。

一月二日 晴れ

午前、延命寺の護摩供養に当然私が行かなければならないかと思っていたら、良男が行ってくれた。すつきりした顔をしてすがすがしく見えた。

一月三日 晴れ

夕方、竹下一家が来る、実に賑やか。あの夫婦の創りだした家庭の楽しそうな雰囲気が見える。

一月四日 曇りのち雨

菜都美たち、一日中いた。直菜美が会津にいる間中三九度の熱があつたそうで、元気なのだが食欲がない。

一月五日 晴れ

十一時ころより店に出る。古いお客様がたくさん来てくださるのが嬉しい。やっぱり花をいじっていることは楽しい。午後美帆と望と菜津美がサーカスに行った。文子も行ってみると言って一人で行った。

一月六日 晴れ

友子が連れて行ってくれて、ジュノンにお祝いにいく。結構高級品らしい品が並んでい

るけれど、何か店の中が乾燥した感じ。私自身、生花園芸品ばかり扱っているためかしら。花茂さんも通りがけに見たが大きなお店だ。

一月七日 雨

盆栽会の初会。雨のため九名の参加。縞君子蘭の四年生を三株、一二〇〇円で売ってしまふ。残念な感じ。梅を六鉢買ったから、あれで取り返せばと思う。夕方光男さん（大越）見える。ガラッパチだけど人はよい。

一月八日 晴れ

午前中、伊妻さんが見える。帝冠群千鳥、山川ホーサイ、瑞雲錦等、全部で九鉢お買い上げ三三四〇〇円。午後雄輝と直菜美を連れ、サーカスを見に行く。きれいな人たち、男女とも素晴らしいスタイル、演技、美しい人たちに見えた。

一月九日

ストーブが調子悪く、ペンチで芯を引っ張り出したら、かえって芯が切れてしまったよう。で加藤さんに取替を頼むことになった。やはり完全に分解しないとだめらしい。

一月十日

サボテン倶楽部新年会、二十三名出席。皆さん立派な品を揃えてお出でになる。どうせ

作るならあのように作りたい。玄関の棚を全部展示場にしてよかった。そんなに広く入らないと私は思ったのだが、お父さんの考え通りでよかった。

一月十一日 曇り

朝のうちにサボテンの展示場をすっかり片づけてしまった所へ、愛楽園から四箱の荷が届いた。昼前から辰巳の店へ行く。古いお客様がきてくださって嬉しい。七千円のアレンジの注文、驚いたけれど何とかこなした。五千円の花束、生花用として五千円くらいなど、客層が大きくなった。

一月十二日 曇り

古い古い箱庭用品を整理する。昔の値札が付いているので標準が取りやすい。お父さんから三倍くらいにつけてよいと言われていたので、高額のものは二倍半位、大体は三倍にしてみた。なかなか楽しみな品がある。

一月十三日 曇り

朝、辰巳病院へ薬をいただきに行く。それから良男と磯ヶ谷病院へ行き、続いて市場に行く。結構いろいろなお客様が見えて忙しい。

一月十四日 曇り

労災病院へ薬をもらいに行く。おじいちゃんと孫たちの分。読み物を持っていかなかったので、歌を作って書きつける。

二十年 三十年来のお客様 笑顔持ち変わらぬ嬉しさ

店に立てば 店で楽しく 昔からとりしきねづか 今も役立つ

吾子ながら 花束作る手先見て 巧みになりしと 見とれ思ほゆ

初会は サボテンも皆賑わいて 門外不出品 一堂に並ぶ

一月十五日 雨

お父さんは市原愛蘭会へ何年振りかで出かける。竹中さんをお願いして、私は留守番。文子さんも買い物に出かけて、私たった一人。忠志さんにやつと手紙が書けた。私の伝えたいことが判ってくれたか、それともこれつきりになるか……。

一月十六日 雨

明日は蘭と花木の会の新年会。何人くらい見えるか、温室内の整備、座敷内の準備、ようやく整った。お天気が上がってくれることのみ祈る。忠志さん、本と手紙を受け取ってくれたことを知る。私とは全く気付いていないらしい。心が落ち着いてくれますよ

うに。

一月十七日 晴れ

晴れてくれて、本当によかった。蘭と花木の会新年会、出席者三十二名。そこへ菅野様と弘一夫妻が見えたので、全部で三十五名。藤色のじゅうたんを二枚に切つて中廊下に敷き、縁側には、スポンジ風の裏付きシートを敷く。良い考えだったと思う。神様、思いつかせてくださつてありがとう。本当にみなさん楽しそうだった。

一月十八日 曇りのち雨

雄輝が耳下腺炎というので、朝、労災病院に連れていく。診察を待っていると電話があり、菜津美も学校で耳下腺炎と言われて、アルファの奥さんに送つていただいて病院に来る。耳下腺炎は、薬も出ないし、発熱したら熱さましを使い、水分を取つて安静にしているだけ。そのあと店番に出る。新しいバイト（斉藤）さんが来る。札幌で土建業をしていた由、他人を使つていた人だから、なかなか人ができている感じ。

一月十九日 晴れ

労災に行つて昨日の支払いを聞く。菜津美だけ千百六十円。ヨウレン菌の検査をただけだけど、雄輝は無料で不思議。部屋の整理がやっと片付く。明日またサボテン交換会、

何人くらい見えるか。灯油注文したらすぐ来てくれた。前回から二十六日目。

一月二十日 晴れ

サボテン交換会例会、出席十一名。光男さん夫婦が来る。綱島さんも見え、桜餅、最中
キャラメル等頂き物がたくさん。午後から保育園のお遊戯会を済ませた直菜美と雄輝を
連れてくる。割合元気なのだが、雄輝は両頬を膨らませている。夕方から直菜美が咳を
し始め、夜救急で労災に行く。

一月二十一日 晴れ

昨日向山さんに教わってメキシコの新井尚子さんにサボテンカレンダーを送る。春蘭、
山採り黄花にキャップをしておいたら、お父さんが全部取ってしまった。納得できない
ので、あちこち電話し、梶さんに聞くと、やはりキャップをしておかないといけないそ
うだ。こういう風に話したら、気を悪くしないように話せるか。

一月二十二日 晴れ

児玉様、嶺芸とあけぼのお買い上げ、山崎様、蘭鉢色々お買い上げ。春蘭の咲く時期に
なるとお客様が増える。午後、菜津美たち三人がきて色々工作をして大散らかし。雄輝
がホットケーキを作り、菜津美がドーナツを作る。三人とも楽しそう。

一月二十三日 曇り一時雪

今日は朝から寒い。温室のストーブはずっとつけっぱなしで、ほとんど一〇℃を変えないようにする。カトレヤ、胡蝶蘭は薄いビニールと和紙のような紙と、さらにビニールと三重のカバーをかけたり外したり加減する。一日かけっぱなしにしたら、白いカビ状の菌が出たのでビスダイセンをかける。

一月二十四日 雨

土曜日曜と続いて雨、しかも寒い。お客は誰も来ない。温室の中も大水、少し暖かくなったらビニールの穴を探して埋めなくてはならない。

一月二十五日 雨

辰巳病院に行く。お父さんの吹き出物の原因が判らないと言われる。それでも薬をいただいて帰る。良男が忘れて市場へ行ってしまったので、タクシーを使う、千五百円。ずいぶん上がったものだ。

一月二十六日 雨

雄輝と直菜美を連れて労災へ。わりに患者は少なかった。帰途はまたタクシー、千百四十円、やっぱり上がったものだ。

一月二十七日 晴れ

今日一日子供が来なくて静かだったと思ったら、夕方六時過ぎ富子から電話で、帰宅途中にバイクと接触事故を起こして、相手を病院に連れてきているので遅くなるから、直菜美をお願いしますと言ってきた。良男が行ってくれた。こちらは可愛くてよいが、富子は大変だ。

一月二十八日 雨のち晴れのち雪のち晴れ

富子が水子の名をつけてくれたので、今朝から早速お線香を上げる。九月二十八日命日の光（ひかる）ちゃん、八月三日命日の海（かい）ちゃんとなった。

十時ころ店を頼むと迎えに来たので十二時まで手伝う。店にいる間すごい雪となった。

一月二十九日 晴れ

今日は完全に晴れ。温室の中の乾いた鉢だけ水差しで水をやり、洋ランはシリンジする。午後、石灰硫黄合剤を溶き、外の鉢から消毒する。六リットル入りの噴霧器に薬剤一〇〇Ｃ、つまり六百倍だが、薬が古いから効くかどうか分からない。臭いはするが。

折々につづった歌

台風の　去りしばかりの海なれど　空あかるくて波もおだやか

日の出前　波おだやかにほんのりと　山の影みゆ　三陸の沖

博多より　来しとうサークルの大学生　ミーティングとて集うホール隅

病院の待ち時間なり　筆とりて　旅の思い出のしくしたたむ

葉まつ　時間も楽し　座しおれば　見知らぬ人もあまた通りて

待つ時間 知り人來たり話し込む その間も楽し 退屈せずに

川崎のお大師様には六十年ぶり 八潮なる母校には五十年ぶり
娘の供で なつかしき土地

おばあちゃん おばあちゃんとして孫十四人 ひ孫五人でこれみな家族

三人^{みたり}とも一番なるぞ み空なる 父を仰ぎて告げ知らせなむ

窓ひろく 青々となお広々と 伊豆の海には夕日輝く

平成一年一月 友子の
参詣のお供をして川崎
大師へ

平成一年九月十五日(敬
老の日に)

昭和三十四年三月園山
珠路菊間中学校卒業
三十二年智世卒業
二十八年富也卒業

平成一年十一月二十四日
伊豆高原大田区民療養所
同行 渡部篤子・福島
田鶴子

くつろぎて 妹らとひと夜 湯の宿や この幸せは母の遺徳か

海近く 魚のうまき宿なれど 降り立つ駅は 伊豆高原とや

バス乗れば いずこ洩らさず下田まち 黒船も乗りて 楽しこの夜

小田原城 いにしえ人のくらしぶり 武士の娘と よくさとされし

芸者とは 縁なき人と思うたに お吉の話 心うたるる

支払の多きを思い　吾子はいま　心痛めてなやみ居る日、日

平成一年十一月
磯ヶ谷病院に良男を連
れていく

誰よりも最高の助手いただきて　吾も家庭も心休まらん

平成二年二月十日

いらいらと　またおろおろと悩める日　注射二本ですぐ治まりぬ

神の子の　自覚を持ちて心根に　輝く光　さし居るを知れ

朝五時に　迎えに来給う　七時には箱根に着きぬ　今の道はや

平成二年二月十四日
箱根塔ノ沢
サポテン専門家連盟（三
橋さんに）

売るでなし 買うには足らぬふところを 父はさだめし 淋しかるらん

売らずとも買わずとも 古き友に会う楽しみを 父はかみしめており

珍しくすばらしきサボテンの数々を ながめて楽し専門家連盟

がいこつの あばらの如くそそり立つ 八幡平はちまんたいの山なみの木は

木々はみながいこつの如 あばら骨 並べて冬の厳しさ思う

平成二年九月二日
玉川温泉の夫を迎えに
竹中さんに案内してい
ただく

みはるかす 熊笹原の遠近に ただ黒きのみ岩立ちており

川の面に溢れ立ちあり 玉川の いで湯のものとすさまじき渦

全速で走りおる 孫の顔美しく こちらの胸も高鳴りて居り

こがね空 赤日落ちぬ 枯木立

飛び跳ねて 犬は枯田を喜びぬ

平成二年九月二十三日
菊間小学校運動会
菜津美 雄輝 望

平成四年一月十二日
サリーの散歩に田圃の
ほうへ

あけ方に窓あけ眺む　三保の海　小舟の灯り五十も百も

平成三年九月十六日

南指し　小舟の灯り競いゆく　まだ暗がりの三保の海はや

豪華なるホテルに泊まり　豪華なる料理いただく　夫と妹と

宿の払い　法事の払い何もかも　息子がもちて　患いしらず

風さやぐ　草原わけて　犬たのし

平成四年一月十五日

思いきり 冬田あぜ道 犬はしる

犬ゆけば 葦原さやぐ 日ぐれ道

子 孫 曾孫ひこ そろいて笑う 年初め

孫は早や 二十歳はたち 和服ふりそでの 映うつろいて (華やかに・賑わしくの推敲あり)

今年こそ 走りぬいたり 十一着

平成四年一月十六日

平成四年一月十六日
竹下玲葉成人式

平成四年一月十八日
耐寒マラソンで雄輝(二
年生)

十一着 今年こそはと 走りぬく

ゴールまで 来て咳きこんで お茶一ぱい

(耐寒マラソンで菜都美
五年生二十二着)

入学して 初めてのマラソン 完走し (菜都美)

二十年三十年来の お客様 笑顔をもちて 変わらぬ嬉しさ

平成五年一月五日 花
市場初市の日到店番に
出

店に立てば 店で楽しく昔から とりしきねづか今も役立つ

初会は サボテンも皆賑わいて 門外不出品 一堂に映ゆ

平成五年一月十日
千葉サボテンクラブ発
例会

丹精の サボテンもちて大勢の 会員寄りぬ 初会の席

店にあれば 店また楽し 家があれば 来客楽し 幸せにして

平成五年一月十三日
店番

吾子ながら 花束つくる手先見て たくみになりしと みとれ思ほゆ

第三回 蘭と花木の展示会 来客多し 五十名近く

平成五年三月二十一日
蘭と花木の会展示会

白生地に 展示品映ゆる 会員の力作みごと 心して眺む

墓地きめて 水子の供養も整いぬ 安堵の気持ち 落着きを持つ

平成五年三月二十八日

折々に疲れをみせて 我が夫は 温室の中でじつと坐りおり

平成五年三月三十日

ご先祖様 おだやかなりと良男云う そのおだやかさ 汝が身^{なれ}にあれかし

平成六年十一月四日

金もうけすると云いつつ 店の金 果てなく持ちて いづくゆくらむ

愛する子　良男のくらしよくあれと　祈る思いが　なぜに届かぬ

ひたすらに　おだやかなれと祈るのみ　吾子の荒れさま　耳にするたび

金　金と　いう人　せめて（わらい）さげすみて　居りしに今は　自らが云う

悲しきは　涙出ぬなり　どうかして（いかにして）この苦を樂に転ぜんと祈る

日毎　夜毎　吾子を思いて祈るのみ　おだやかなれよ　おだやかなれよ

吾子良男 笑顔を持ちて今日もまた わが前に現れと いつも念じつ

お母さん ごめんなさいね 母さんの心分からず 今にして悔ゆ

平成六年十一月六日
庄野都志母に捧ぐ

母さんにつらい思いをさせました 今にして悔ゆ 悪い娘でした

親ごころ 今かみしめて しみじみと 吾子をどうして守りとおさむ

神よりの吾子の本領あらわれて たのしき顔を 見たき毎日

御仏前 坐せば背なより暖かく 陽に包まれて しあわせの日々

冬の御仏前

御仏前 坐せば涼風そよそよと 右に左に 吾が身心地よし

夏の御仏前

おおみおや 心にしみて 汝がうえに つねにあたたかく 守り給えかし 平成六年十二月十日

父と母と 汝が手にあたたかく 包まれて 心安らかに 命おえたし

心こめて 吾子の実相 現れんことを

祈り 想いたり 今日満願の日よ

平成六年十二月二十四日

五十三年 生活の地を おろがみて いま離れんとす わが運命の日よ 平成九年二月十一日

家も草も犬も変わらず 我のみが 此の地離れて 今ゆかむとす

竹下の家族みんなで あたたかく 支えてくれむ 千城台の家

いたこなる蓮池のハス 白 ピンク 濃緋もありて 葉もすがすがし

日付け不詳 鳳来寺山
へ参詣の折

花の雨 枝垂れて嬉し 福星寺

平成九年三月三十一日
四街道吉岡下^{した}夕山^{やま}福星^{ふくしやう}
寺にて

福星寺 枝垂れ桜の 淡くして

鄙の寺 庭に桜の すだれして

鄙の寺 苔庭に花の すだれ降り

福星寺 枝垂れ桜は 花すだれ

我がために 初めて入る病院は 緑あふるる花もあふるる

平成九年四月十八日
千城台中山クリニッ
クに初めて通院

東京駅 出でて一時間 どこまでも平らな平らな 地の広がりよ

平成九年五月三日
竹下一家と東北へ新幹
線にて

那須塩原 低い山並つらなりて 関東平野の端に來たりぬ

平成九年七月二十二日朝日新聞 「折々のうた」 切り抜きより

美智子皇后御歌 【戦後五十年を前に両陛下が硫黄島へ慰霊の旅をした時の一首】

慰霊地は今安らかに水たたふ

如何ばかり君ら水を欲りけむ

若葉道　ふりむかず往き　還らざる

滝　落としたり　落としたり　息もつかず

夕蟬や　生きるるさきの　日の如し

平成九年七月十九日
テレビにて

（珠路注…テレビで見た
句に昔の自分と重複し
たもよう）

昭和十九年九月十九日
園山徳三郎の出征の日
をそのままに

朗子さえのぬり絵

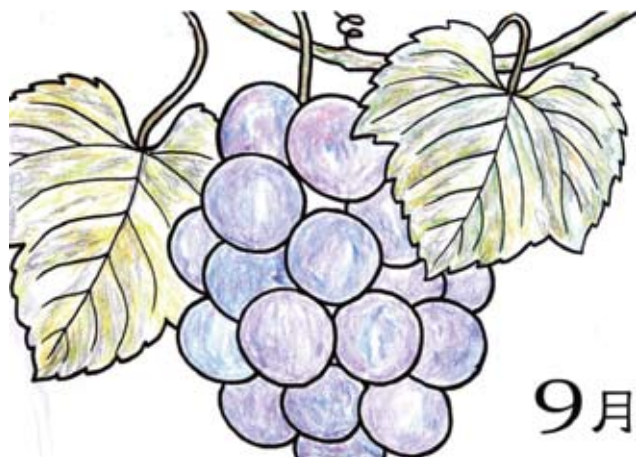


平成十八年十二月二十四日、風邪がもとで腸閉塞を起こし、救急車で病院に入院しました。一ヶ月間の寝たきりの後、自力で歩けるようにリハビリ入院を五ヶ月続けました。入院の退屈をまぎらすために孫の玲葉が持ってきたぬり絵が大変気に入り、それ以来毎日毎日家でも、デイサービスでもぬりえを楽しんでいます。書きためた絵は人に絵葉書代りに送ったり、スケッチブックに貼って楽しんでます。手や頭のりハビリにもずいぶん役に立ちました。

色使いや重ね塗りの丁寧さなど、その日の体調によって出来栄えは違いますが、ここ数年、「ぬり絵と出会えてほんとうに楽しい」と喜んでいきます。(珠路)



一番初めに病院で描いた花



9月



見る見るうちにこんなに繊細な絵が描けるようになりました







色鉛筆のタッチは弱いけれど、調子の良い時は何色も何度でも塗り重ね、
一日かかって一枚の絵を仕上げます





















あとがきにかえて

竹下
珠路

母古川朗子^{さえ}は、平成二十二年八月十四日夜、ショートステイ先でベッドから落ちて大腿骨頸部を骨折しました。搬送された病院での整復固定手術は成功し、一時は退院の準備まで出たものの、その後の回復がままならず体力の低下も著しく、十月二十五日朝、眠るようにその生涯を終えました。ベッドの上では、入院中に孫の貴之夫婦がプレゼントしたクマのぬいぐるみをたいそう気にいり、意識のない中でも、永眠する瞬間まで大事に腕に抱え続けていました。

考えてみると、母の人生は苦難の連続でした。大正十二年に七歳で関東大震災にあい、直後に実母を亡くし、昭和十六年に父親を亡くし、太平洋戦争で夫を亡くし、その後は再婚相手の夫とその子ども、自分の子も含めて八人もの子どもたちを育てるために必死で働き、ようやく生活が落ち着いていた途端に娘了子^{のりこ}の失踪に出会い、息子の精神病発症も受け入れねばならず、とうとう了子^{のりこ}の消息を知ることできずに生涯を終えました。

「私の名前は朗^{ほか}らかな子と書くのよ」といつも言っていました。困難の続く人生であっても、黙って受け入れてきたのは名前どおりを願ったからでしょうか。本当は平穏な日々をじっと待ち続けた人生であったのかもしれない。

娘了子^{のりこ}の消息は全く届かず、北朝鮮による拉致問題の解決の糸口も見えぬまま、母は逝っ

てしまいました。「悲しきは 涙出ぬなり…」の言葉を残して。

かつて母に「自分史を書いてみたら」と言って一冊の国語ノートを手渡した時、「いっぱいになったら私が本にしてあげるからね」と約束しました。いま、ようやく母との約束をひとつ果たすことができました。もうひとつの約束は^{のりこ}子を取り戻すことです…



古川朗子年譜さくえ

大正五年八月二十三日

庄野篤朗・ルイの長女として東京府麹町四丁目に生まれる

大正十年ころ

父の仕事の都合で蒲田に転居

大正十二年四月

神奈川縣立女子師範付属小学校入学

大正十二年九月

関東大震災の直後、病弱の母ルイ死去

大正十三年

父篤朗は継母都志と結婚

昭和二年

東京府蒲田 相生小学校へ転入

昭和九年

東京府立第八高等女学校卒業

昭和十二年二月十六日

園山徳三郎と東京の如水会館で結婚 北区西ヶ原へ居住

昭和十二年十二月二十八日

長男園山富也出産

昭和十六年ころ

園山徳三郎の仕事で朝鮮の京城へ転居

昭和十六年五月二十日

父庄野篤朗急逝

昭和十六年八月六日

長女園山智世出産

昭和十八年ころ

朝鮮より帰国

昭和十九年一月一日 義母園山マサ死去

昭和十九年三月二日 二女園山珠路出産

昭和十九年九月十九日 園山徳三郎出征

昭和二十年三月 義父園山金次郎の田舎（千葉県市原郡大厩）へ疎開

昭和二十一年二月 義父は疎開先に家を構える

昭和二十年四月十七日 夫園山徳三郎フィリピンルソン島にて戦死

戦死広報は昭和二十三年に届く

昭和二十六年 古川九洲男と結婚

市原市菊間の家で園山の子どもたち三人と、シベリア抑留から帰った古川九洲男と、満洲から引き揚げたその長男古川弘一、長女古川はつ枝とともに七人の大家族となる。この後十年以上ひき売りや露天商をして生計を立てる

昭和二十七年四月二日 古川良男出産

昭和三十年一月一日 古川^{のりこ}了子出産

昭和三十四年九月九日 古川友子出産

昭和三十六年一月十八日 義父園山金次郎死去

昭和三十年代後半 市原市辰己台マーケットに花屋出店 平成八年まで続く

昭和四十年十二月六日 継母庄野都志死去

昭和四十八年七月七日 娘古川了子^{のりこ}失踪 以来現在に至る

平成五年五月一日 九洲男の長男古川弘一死去

平成八年四月十日 古川九洲男死去

平成九年二月十一日 市原市の家を去り、千葉市の竹下宅に同居

平成十四年十二月 古川了子^{のりこ}が北朝鮮に拉致された疑いが濃厚と判明

平成十七年四月 古川了子^{のりこ}の拉致認定を求める行政訴訟提訴

平成二十二年八月 ベッドから落ちて大腿骨頸部骨折

平成二十二年八月 病院で九十四才誕生日

平成二十二年十月二十五日 老衰のため死去

歩み来し道 ― 古川朗子 自分史 ―

平成二十二年十二月十日 発行

著者 古川 朗子

編集・発行 竹下 珠路

制作 株式会社メロウランド